

# 『三国志演義』の生成

小 松 建 男

## I 歴史の痕跡

近世小説について論ずる際の困難の一つは、一人の作者によって創作されたとはい難い作品が多いことである。

『三国志演義』の場合、元代の三国志物語の姿を『全相平話三国志』によって知ることが出来る。全相平話を演義と比較してみれば、『三国志演義』の作者が、全相平話であるか、それよりも発展したものであるかは不明であるが、既に存在した三国志物語を資料として利用したはずである。

筆者は、短編小説について、できあがった作品と利用した資料を比較した結果、作品は資料の文章に加除・移動などの変更を加えると言う方法で作られるので、作品の中に利用した資料の文章と、作者によって新たに書き加えられた文章が混在していることを確認できた<sup>1)</sup>。

長編小説の場合はどうなのであろうか、短編小説と同じように作られたのであろうか。もし同じように、利用できる箇所は古いものをそのまま使い、必要なところを新しく書き足すと言う方法で作品を作り上げたとすれば、利用した資料の痕跡が残っているはずであるから、資料が失われていたとしても、残った痕跡から、逆に失われた資料について予測することも可能なはずである。

『三国志演義』には、呼称の一定しない登場人物が何人かいる。筆者はこれこそまさに作者が利用した資料の痕跡の一つであると考えている。以下において、呼称の不統一は作者が利用した資料の痕跡であるという仮定にたって見直した場合、『三国志演義』はどのような姿を我々に見せるのかを検討してみたい。

## II 呼称のみだれ

### 1 重層仮説

『三国志演義』<sup>2)</sup>において登場人物の呼び方は、地の文か台詞かによって異なる。地の文では劉備と諸葛亮のみ「玄德」と「孔明」と字で呼び、他は張飛のように名前で呼ぶことでほぼ一貫している。台詞では、敬意を示すべき相手

は字もしくは官職をつけて、敬意を示す必要のないまたは敵意を持つ相手は姓名で呼ぶのが大体の傾向である<sup>3)</sup>。

ところが、関羽と趙雲は複数の呼び方が混在している。地の文において、関羽は、関某・関公・雲長のいずれかで、趙雲は趙雲・子龍のいずれかで呼ばれて統一がない。さらに関羽は台詞においても、雲長もしくは関公、まれに関某と呼ばれている。この関某は姓名（関羽）の置き換えと考えられるが<sup>4)</sup>、台詞では主に自称として使われ、他人が関某と呼ぶのはまれである<sup>5)</sup>。

この関羽と趙雲の呼称の乱れは、何に由来するのであろうか。『三国志演義』以外の三国志に題材をとった作品は、関羽と趙雲をどのように呼んでいるかを調べてみると以下のようになっている。

元の至治年間（1321-23）刊行の『全相平話三国志』を見ると、関羽はほとんど関公、趙雲はほとんど趙雲であり、雲長や子龍は数例にすぎない。三国志を題材にした元曲は、元刊本（『元刊雜劇三十種』）が三種類残されている。「白」に限れば、『単刀会』に関將軍・関某が各1例、『博望焼屯』に関公・関某各1例が見える<sup>6)</sup>、『西蜀夢』は「白」がない。

明の成化年間（1465-87）刊行の『花関索伝』を見ても、雲長は『別集』の「唱」の部分に2例あるばかりで、関公<sup>7)</sup>の方が圧倒的に多く、趙雲はやはり趙雲である。元曲も明代のテキストでは、雲長を使っている。たとえば同じ『単刀会』、『博望焼屯』であっても趙琦美（1563-1624）の『脈望館鈔校本古今雜劇』では雲長が見える。

元曲の場合元刊本の作品数と用例が少ないのが残念であるが、全相平話や『花関索伝』は、ほとんど関公と趙雲であることから見て、雲長や子龍と呼ぶことは、『三国志演義』以前にはほとんどない現象であると考えられる<sup>8)</sup>。

このような『三国志演義』以外の作品での関羽と趙雲の呼び方を参照すると、関羽と趙雲の呼称の乱れは、『三国志演義』中に古い層（関公・趙雲）と新しい層（雲長・子龍）、二つの層が混じり合っていることを反映しており、関羽・趙雲を雲長・子龍と呼ぶ新しい層の中には、『三国志演義』として最後にまとめ上げた人物（作者）が書き加えた部分を含み、一方二人を関公・趙雲と呼ぶ古い層は、作者が利用した資料（または資料群）をそのまま伝えた部分であると思われる。

なお厳密に言えば、作者が、関羽と趙雲を関公・趙雲と呼ぶ古い資料と雲長・子龍と呼ぶ新しい資料という二つの資料を利用していると言う可能性もあるが、ここではとりあえず、雲長と呼ぶ部分は全て『三国志演義』の作者によ

って書かれたもので、関公と呼ぶ資料だけを作者は利用したと見なして話を進めることにする。雲長と呼ぶ資料を作者が使っていたか否かは改めて検討してみたい。

## 2 古い物語と新しい物語

前の節で述べたように関羽と趙雲をどう呼ぶかは、作品全体としてみれば一貫しておらず、乱れているのであるが、個々の話や場面を取り出してみると、どれか一つの呼称のみが使われている、または一つの呼称が優勢で、他はあまり使われていない。つまり呼称は、個々の話をとってみると、ほぼ一貫しており、一貫性のなさに見えるのは、話ごとに使う呼称が異なっていることによるのである。これは、話によって作者の資料の取り込みかたが異なっていることを反映していると考えられる。作者は、二人を雲長・子龍と呼んだと思われるので、二人を関公・趙雲と呼ぶ話は作者による手の加わることの少ない古い層の、雲長・子龍と呼ぶ話は作者により大がかりに手を加えられた可能性のある新しい層の、それぞれの特色を示しているはずである。

そこで、まず関羽を関公と呼んでいる話と雲長と呼んでいる話と、趙雲を趙雲と呼んでいる話と子龍と呼んでいる話を取り上げて、古い層と新しい層の間の違いについて検討してみたい。

関羽の場合、使用している呼称と内容を考慮すると、A、劉備が荊州にたどり着くまで(1-307)、B、赤壁の戦いを経て劉備が漢中王になるまで(308-702)、C、関羽の襄陽奪取(702-09)、D、関羽の龐徳との戦いから死まで(710-43)の四部分に分けることが出来る。

まず関羽が地の文と台詞でどのように呼ばれているかを表にするとつぎのようになる。

区分	A	B	C	D
地の文	関公・雲長	雲長	雲長	関公
台詞	関某・関公・雲長	雲長	雲長	関公・関将

Aについてはつぎの節で検討することにし、先にB以下について見ておきたい。

Bは、諸葛亮が中心の赤壁の戦いを山場とした荊州・益州争奪を、Dは関羽の剛勇ぶりとその思いがけない最後を描いた作品として、それだけを切り離し独立させてもおかしくないくらいにまとまりをそれぞれもっており、雲長と呼

ぶBは、作者が一つの物語にまとめ上げた部分、関公と呼ぶDは『三国志演義』より以前に別人の手で作られた関公物語（または物語群）が存在していた部分と考えられる。

古い層をより多く残すと思われるDは戦闘場面が多く、関公は剛勇ぶりの目立つ武の人であるが、新しい層が多いと思われるBは、雲長の戦う姿をあまり描いていない。

Bで関羽が活躍する場面は少ないが、主要なものは、a華容道で曹操を見逃す（486-89）、b長沙攻略で黄忠を帰服させる、（506-09）、c魯肅との単刀会（634-37）の三つである。かつての恩義を思い曹操を見逃し（a）、敵将黄忠が落馬した際そのまま見逃す（b）関羽は、「義」の人であり（毛宗崗本『三国志演義』はaとbの両場面の表題を「義によりて…を釈す」としている）、荊州返還をねらった、たくらみのある魯肅の招待を巧みに切り抜ける姿（c）は、機略の人である。

この三場面は、全相平話にも見えるが、そこに描かれた関公はやはり武の人であってBの雲長のような「義」の人や機略の人という描き方ではない。

さらに、「単刀会」は元曲にも見える。元曲も、全相平話と似た筋立てで、やはり関羽は剛胆な人物であり、理屈で荊州返還を求めてくる魯肅にたいし、この刀で三番目に首を落とされる人間になりたいかと言いつくような人物である。ところが『三国志演義』では、正史『三国志』「魯肅伝」に見える関羽と魯肅の間で交わされた、荊州返還交渉の記述をここに利用し、二人が論争したように書き直している。

Bには諸葛亮が周瑜と論争したり機略で危機を脱する話が繰り返し出てくるが、この「単刀会」は主人公こそ諸葛亮ではなく関羽であるが、趣向としては同じものである。Bに登場する雲長は、古い層に見える関公とは異なる、作者の好みに合う形で新たに造形された人物といえるであろう。

Cは特異な部分である。長さが短いので、呼称のみでいえば、Bと合併してしまってもおかしくない。ところがその内部は、a曹操が劉備と孫権の仲を裂こうと画策する、b諸葛瑾が、関羽の娘と孫権の息子の縁談を持ってくる、c関羽が五虎将に任命されたこと、魏の荊州駐屯軍攻撃の命令が下されたことが費詩によって、彼に伝えられる、d関羽が襄陽を占領するという四つの話題から成っており、内容から見ればDの発端であり、むしろBとではなくこちらと合併すべき部分である。

また全相平話でCに該当する箇所を見ると、まずbの縁談があり、そのあと

突然陳登が関羽のもとへ身を寄せた話となり、それが原因でDの龐徳との戦いへと続くことになっている。

bの部分は、全相平話にも見えるだけあって、古い層に属する証拠の関公が2例ある。Cで関公があるのはbのみである。さらにb中のつぎの箇所、

瑾曰“…某主人呉侯有一子，…某聞將軍有一女，特來求親。…此誠美事，請君侯思之。”雲長勃然大怒曰：“吾虎女，安肯嫁犬子耶。再休多言。”

これは全相平話<sup>9)</sup>の、つぎの文をふまえている。

江吳上大夫言曰：“吳王之子體知荆王有一女，兩家結親如何？”關公帶酒言曰：“吾乃龍虎之子，豈嫁種瓜乃孫。”

思うに、作者が利用した関公物語は、今のCの一部も含む、全相平話に近い内容のものであったのではないか。魏との争いの原因が、作者から見ると不自然であったので、全面的に書き換えてBとのつながりをよくしたのが、今のCの姿であると思われる。

趙雲の場合、子龍がもっとも優勢（趙雲は1例しかない）なのは劉備が孫権の妹を娶る話（518-30）である。この話で趙雲は諸葛亮に密計を授けられて呉に行く劉備に同行し無事連れ帰ると言う重要な役割を与えられている。全相平話や元曲（『隔江闘智』）にもこの話は見える。但し両者とも劉備は単独で呉に行くことになっているので、趙雲が活躍する今の話は、成立が新しいと思われる。この話での趙雲は、劉備の側にあつて呉の謀略に孔明の計略に従って対抗する、いわば孔明の代理として働く知の人である。

桂陽攻めの話も、子龍が多い。ただこの話の場合、戦闘場面である前半は趙雲と子龍が入り交じり、後半は全て子龍と呼んでいる。後半は戦闘場面ではなく、降伏した桂陽太守趙範が、後家となっていた兄嫁を趙雲に嫁がせようとするのを拒絶する箇所で、ここでの趙雲はすぐれて倫理的な人物として描かれている。

趙雲が優勢である他の話は、関公同様に武の人としての勇ましさに力点をおいているのであるが、この2例は、武の人よりも理知的で思慮深い側面を描こうとする傾向が強い。

### 3 古い層と新しい層

前の節で、古い層（関公・趙雲）と新しい層（雲長・子龍）を比較してみると、二人とも、古い層では武の人として描かれているのに対し、新しい層は、知性的人物として造形しようとする傾向があることが分かった。この節では、

一つの呼称が優勢なのであるが、ところによって他の呼称が混じっている、呼び方のゆらぐ場合は、前の節で確認した新旧二つの層の違いがどのようになっているのかについて検討してみたい。

まず趙雲が、劉表にあいに行く劉備を護衛するために同行する話（338-42）。前半（338-39）は、趙雲と呼んでいる。

是日請館舍暫歇。趙雲引三百軍士圍繞，保護主公。雲帶甲挂甲，行坐不離。…是日…趙雲帶劍於側。…文聘、王威入請趙雲赴席，雲推辭不去。玄德令雲就席。

ところが、劉備が危険を察知して単身逃れたあと、趙雲が劉備がいなくなったことに気づき探し回る場面は、つぎのように子龍が多くなっている。

趙雲正飲酒，忽見人馬動，急入觀之，席上不見玄德。子龍大驚，…喝問曰：“吾主何在？”瑁曰：“使君逃席，不知何往。”子龍是謹細之人，不肯造次，遍觀軍中，并無動靜，前望大溪，別無去路。子龍曰：“汝請吾主，何故令着軍馬圍捕？”瑁曰…雲曰：“汝逼吾主何處去了？”瑁曰…子龍疑惑不定，直來溪邊看時…。子龍再回時，蔡瑁已入城去了。子龍拿把門軍追問，…。子龍欲入城中，恐有埋伏…。

前半の趙雲は、警護にあたる実直な武人であるが、後半の子龍は別人のように、語り手も彼を「謹細之人」というよう、慎重に情勢を判断し行動する人物に変わっている。

ところがよく見てみると、後半でも趙雲を主語にしている箇所は、前半の彼とあまり変わらない。こころみに、趙雲を主語にした文のみを集めて、前半と後半をつないでみると、最後の趙雲の台詞だけ、つながりが悪いが、他はこのままで十分意味が通じ、古い層の本来の趙雲らしくなっている。

是日請館舍暫歇。趙雲引三百軍士圍繞，保護主公。雲帶甲挂甲，行坐不離。…是日…趙雲帶劍於側。…文聘、王威入請趙雲赴席，雲推辭不去。玄德令雲就席。趙雲正飲酒，忽見人馬動，急入觀之，席上不見玄德。雲曰：“汝逼吾主何處去了？”

これによっても分かるように、後半の彼が慎重に見えるのは子龍を主語にした文によってである。ここにも趙雲は武の人次子龍は知の人と言う違いはあらわれているといえる。

なお新しい層の「子龍曰：“汝請吾主，何故令着軍馬圍捕？”」は、古い層の「雲曰：“汝逼吾主何處去了？”」と内容的に重複している。これは、そのあとの「子龍疑惑不定，直來溪邊看時」という、慎重に事実を調べる彼の行動

の導入部も必要となり、本来あった文を削除して、少し無理をして挿入したためと思われる。趙雲を主語とする文章を集めたとき、最後の「雲曰：「汝逼吾主何處去了？」」だけが、つながりが悪かったのも、この子龍ではじまる台詞以下の文を挿入しようとしたため、本来あった文章が失われてしまったからであると思われる。

つぎ、有名な長阪坡での奮戦（406-12）の場面を見てみたい。

「却説趙雲自四更軍至」ではじまるこの一節、前半では主に彼を趙雲と呼び、後半の鐘繡・鐘紳の兄弟をうち倒すところから、劉備に阿斗を手渡すまでの部分は主に子龍と呼んでいる。

まず前半の地の文に子龍は2例ある。一つは趙雲が討ち果たした武將と、その背負っていた宝剣（引用では省略したが「青釭」と言う銘を持っている）について説明しているつぎの箇所。

正走之間，見一將手提鐵槍，…趙雲便不答話，直取那將。交馬處一槍刺着倒於馬下從者奔走。那員將乃是曹操隨身背劍心腹之人夏侯恩。…正撞着子龍，一槍刺於馬下，…方知是寶劍也。雲聽後軍已到，…

もう1例は、「子龍を生け捕りにせよ」と曹操が下知した台詞のあとに続くつぎの文。

因此子龍得脱此難，乃是主人洪福之致也。

この2例に共通するのは、子龍が、戦いの描写ではなく、語り手による説明の箇所に見えていることである。

第1例目に出てくる夏侯恩は架空の人物であり、説明文全体「那員將乃是曹操隨身背劍心腹之人夏侯恩。…正撞着子龍，一槍刺於馬下，…方知是寶劍也。」を、つぎのように削ってみても叙述に不都合は生じない。

正走之間，見一將手提鐵槍，…趙雲便不答話，直取那將。交馬處一槍刺着倒於馬下從者奔走。雲聽後軍已到，…

この戦いの中で、趙雲に殺された敵の武將は、夏侯恩と鐘氏兄弟のみである。実は鐘氏兄弟も架空の人物であり、その上趙雲が夏侯恩から奪った名剣「青釭」によって殺されている。夏侯恩についての説明は、鐘氏兄弟の話と共に名剣「青釭」にまつわる話としてあとから付け加えられた挿話<sup>10)</sup>と考えられる。

一方、もっぱら子龍を用いる後半の地の文にも、鐘氏兄弟を討ち取って長阪坡へ急ぐ箇所に、つぎのように趙雲が1例見える。

紳落馬而死。餘者盡皆奔回。趙雲得脱，望長阪坡而來。後面文聘又引軍趕

来。子龍已到橋邊…

一方鐘氏兄弟の話のすぐ前の文章はつぎのようになっている。

却説趙雲身包後主在懷中，直透重圍，…前後槍刺劍砍，殺死曹營名將五十餘員。史官有詩曰…

ここで、この「史官有詩曰」と鐘氏兄弟の話の削り、「殺死曹營名將五十餘員。」のあとただちに「趙雲得脱，望長阪坡而來。」と続けても何ら違和感はなく、作者が利用した資料の段階では、これに近い状態であったと考えられる。

つぎ関羽のAの部分について見てみたい。Aの前半では、関羽の登場は散発的で用例も少なく、関公と雲長どちらを使用するかは場面によって異なる。後半では、関羽の登場回数も用例も多く、呼称は関公が圧倒的に多い。

後半からは、曹操の徐州攻略により劉備と離ればなれになってしまった関羽が、張遼の説得で曹操に身を寄せるところからはじまり、劉備の居所を知り、古城で再会するまでの関羽を主人公とした一続きの物語を取り出すことが出来る(237-79)。この話は全相平話や元曲(『千里独行』)にも既に見えるよく知られた物語である。また関公を多用することから見ても、D同様に『三国志演義』に先行する関公物語がやはり存在していたと思われる。

このAの関公物語では、新しい層(雲長)がどのように混じり合っているか、いくつか例を挙げて検討してみたい。

まず関羽が張遼の説得によって曹操に降伏する話。この話は、地の文も台詞もほとんど関公を使っている。その中で唯一まとまって雲長が使用されている箇所は、関羽が降伏のための三条件を挙げ、それを張遼が曹操に報告している場面である。

引用箇所は、張遼から三つ目の条件を聞いて難色を示す曹操の台詞からはじまる。ここに引用した箇所の前後は、みな関公を使っている。

操擺首曰：“此事却難從之。吾養關公何用？”遼曰：“…劉玄德待雲長不過恩厚耳。丞相更施厚恩，以結其心。何憂雲長之不住也？”…張遼再往山上回報雲長。雲長曰：“雖然如此，暫請丞相退軍，…”張遼再回，見曹操說了。…荀彧曰：“不可，恐關公有變。”操曰：“吾知雲長忠義之士也。

必不失信。”遂引軍退。關公引敗兵入下邳…

全相平話や元曲を見ると、この場面は曹操がすぐ三条件を認めたことになっており、上の引用に該当する箇所はない。引用した箇所は、関羽の三条件にたいしてまず曹操が難色を示し、やっと条件を認めたと思うと、関羽がさらに一時軍を引いてくれるようにと追加条件をだす、これに対し今度は荀彧がその要求に



異議を唱えるという、交渉のもつれを描いた箇所である。関羽を関公と呼ぶ台詞もあるので、作者が新たに追加した箇所ではなく、本来あったものを大幅に書き直して、関羽の運命や如何にという緊張を高める効果をねらった箇所であると思われる。

この関公と呼んでいる台詞を雲長と呼んでいる台詞を比較してみると、両者はあきらかに異質のものである。関公と呼ぶ台詞は簡潔に自分の意見をいうのみである。ところが、雲長と呼ぶ台詞は、「劉備は関羽をそれほど厚遇していないから、厚遇してその心をとらえれば」、「彼は忠義の士であるから、信用を裏切らない」と、どちらも根拠と判断からなる分析的な発言であり、しかもその根拠に関羽が「義」の人であるからという、人の心の内面に踏み込んだ解釈を求めている。

関羽が曹操に降伏する話全体を見渡すと、台詞の中で雲長と呼んでいる箇所はこの他に2例ある。2例とも、関羽が「義」の人であることを理由にした、分析的な発言である。

一つは何とか関羽を降伏させたいという曹操に対し、程昱が献策するつぎの例(239)。

程昱献計曰：“雲長有萬人之敵，更與玄德義氣深重，非智謀不可取之。…只作逃回的入下邳去見關公，…却引關公出戰，…然後或擒或説可也。”

もう一つは、降伏した関羽が曹操を拝する場面のつぎの台詞(242)。はじめの引用中に見えた「雲長忠義之士」は、ここでも使われている。

關公下馬，入拜曹操。操乃答禮。公曰：“敗兵之將，深荷丞相不殺之恩。安敢受答拜之禮。”操曰：“吾素知雲長忠義之士，安肯害。操乃漢相，公乃漢臣，雖名爵不等，敬公之德耳。”關公曰：“文遠代稟三事，望丞相仁慈。”

この引用中の、「操乃答禮。公曰：“敗兵之將，深荷丞相不殺之恩。安敢受答拜之禮。”操曰：“吾素知雲長忠義之士，安肯害。操乃漢相，公乃漢臣，雖名爵不等，敬公之德耳。”」は、曹操の関羽に対する敬意がよく描かれている。雲長を使う曹操の台詞があとのものであることは間違いないが、関羽の台詞の方は、「公曰」となっているので、作者によって付け加えられた台詞でないと思われるが、あとの曹操の台詞とよく合いすぎている。その後にある「關公曰：“文遠代稟三事，望丞相仁慈。”」と比較してみると、いささか異質なものを感じる。あるいはあとの曹操の台詞を付け加える際に、この関羽の台詞もそれに合わせて書き直されているのではないかと思う。

つぎに、劉備夫人達をつれて許昌についたときの話（242）を取り上げてみる。

關公自到許昌，操待之甚厚。三日小宴，五日大宴，上馬一提金，下馬一提銀，及美女十人以侍之。雲長不能推托，將所賜美女盡送入內府，令服侍二嫂嫂，金銀器皿綬疋等件，遂逐一抄寫明白歸庫。公三日一次，於內門外躬施禮，…

全相平話の該当箇所はつぎの通り（420）。

曹操亦深禮而待關公，三日一小宴，五日一大宴，上馬金，下馬銀，又獻美女十人與關公爲近侍。關公正不視之，與甘，糜二嫂一宅分兩院。

ここでも作者は、全相平話が「關公正不視之，與甘，糜二嫂一宅分兩院。」と結果を簡潔に記している箇所を、まず「雲長不能推托」と関羽の心理を説明する文を追加したうえで、「將所賜美女盡送入內府，令服侍二嫂嫂，金銀器皿綬疋等件，遂逐一抄寫明白歸庫。」と曹操からの拝領ものの取り扱いを細かく報告している。

これら雲長と呼んでいる箇所は、関羽が「義」の人であることを繰り返し強調している。Aの関公物語で作者によって追加された文章が読者に印象づけようとする「義」の人という関羽像は、Bの「関雲長義釈曹操」登場する、敗残の身の曹操を前にして、見逃してしまう関羽の姿とはるかに呼応している。しかも関羽が曹操を見逃した理由は、まさにこのAの関公物語における曹操が彼にしめした厚情に恩義を感じているからなので、作者は、これらAの関公物語で追加された文章を、Bの「関雲長義釈曹操」と前後照応させるために、あらかじめ伏線として周到に用意しておいたと考えられる。

### III 残された問題

関羽と趙雲に複数の呼称が存在するのは、『三国志演義』に新旧二つの層があるからという仮説から出発して、幾つかの場面を検討してきた。分析の結果を見れば、『三国志演義』の内部は、古い層のよく残っている部分、ほとんど新しい層ばかりの部分、古い層を核として新しい層がその周りを覆っている部分など多様である。また二つの層を比較すると、呼称ばかりでなく人物造形など内容面でも、よく見れば異質なものを指摘できる。もし新旧二つの層を識別することが出来れば、古い層からは『三国志演義』成立以前の三国志物語の姿を、新しい層からは作者がどのような作品を目指したのかその創作意図を明らかにすることができるはずである。

ただし、関羽と趙雲の呼称によって、新旧を分けるという方法には限界がある。確かに作者が何の理由もなく一人の登場人物に複数の呼称を混用することは少ないはずなので、二人の呼称は二つの層を分離するときのおおよその目安にはなる。それでも作者が、前後の文章に引きずられてその呼称を踏襲してしまった、長編の場合完成までに時間がかかるので、その間に呼称が変化してしまった、また作者の原稿段階から書物として刊行までの間のどこかで誤写があったなどといったことはおこりうる。したがって、二人の呼称のみによって新旧の識別をした場合、上記の原因により識別を誤るおそれは常につきまとう。

幸い『三国志演義』には、曹操と曹公や許昌と許都など呼び方に揺らぎがあるものはまだ存在する。今後これらの中から二つの層の間で使い分けされているものを見出し、関羽と趙雲以外の新旧を識別できる痕跡の数を増やせば、確度があがり誤る可能性を小さくできるはずである。

なお今回は、新旧二層の識別が可能であることを主張したに止まり、作者が利用した資料がどのようなものであったのかについては細かく検討していない。

Aの関公物語と呼んだ部分を見ると、その後半にあたる「千里独行」から「古城聚義」まで(259-280)は、地の文は前半と同じく関公が多いが、台詞では前半と異なり雲長と呼ぶ方が普通になる。これは関公物語と仮に呼んだ資料が、実は一つの長編ではなく、関公を主人公とした短編の集まりであったのか、あるいはAの関公物語自体が、いくつかの層からなっていることを意味するのかと言った、古い層に残っている資料の性質。また、作者が利用した資料の中に雲長と呼んでいるものはなかったのかという新しい層と作者の問題等は別にあらためて検討してみたいと思う。

#### 注

- 1) 『『封陟』の改作』(『中国文化』49号 1991)、『范猷児双鏡重円』の創作方法』(『中国文化』51号 1993)、『負心の重さ』(『中国文人論集』(明治書院 1997) 所収。
- 2) テキストは、『三国志通俗演義』(上海古籍出版社 1980)を用い、該当個所の頁数を注記する。
- 3) たとえば、劉備が荊州の劉表に身を寄せたとき、劉備を荊州にとどめることに反対する蔡氏達は「劉備」と呼ぶ。また呉の孫権が、劉備と組んで曹操と戦うべきか迷っているとき、曹操に降伏すべきと考える張昭達は「曹公」といい、戦うべきと考える魯肅達は「曹操」という。周瑜も主戦論の立場なので「曹操」と言うが、魯肅に偽りの降伏論を述べるときだけは張昭らと同じく「曹公」(『諸葛亮智説周瑜』431)とっている。

- 4) 地の文であるが、関羽を「姓關、名某、字雲長」と紹介した箇所がある（『諸葛亮二氣周瑜』530）。
- 5) 他人が関羽を関某と呼ぶのは、彼により感情を持っていないときが多い。袁紹は自慢の武将顔良を関羽に殺された時、腹を立てて劉備に「汝兄弟關某斬吾愛將」（『雲長策馬刺顔良』249）といている。
- 6) 「唱」には雲長もある。韻文は、押韻や字数の工夫（関雲長なら三文字）も考慮すべきであろうから、ここでは調査対象から除外した。
- 7) この他には、荆王、関統軍、関元帥という呼び方も見られる。
- 8) 『花関索伝』と『三国志演義』の刊行年代は離れていない。『三国志演義』や元曲の明のテキストに雲長が多く見られるのは、小説や戯曲が、俗の世界から『三国志演義』の序に言う「雅俗共賞」の世界へ移行してきたことの結果であるかも知れない。
- 9) 引用は钟兆华『元刊全相平话五种校注』（巴蜀书社出版社 1990）による。
- 10) 「青釭」は、「趙雲截江奪幼主」に趙雲の得物として登場する（585）。あるいは、趙雲とこの宝剣についての説話が存在するのかも知れない。

(筑波大学)